「ネロナムブル」ーダブルスタンダードへの反発

大津　隆文

最近韓国では「ネロナムブル」という言葉が流行っているという。ネ（自分）がすればロマンス、ナム（他人）がすればブルリュン（不倫）という意味で、いわゆる二枚舌、ダブルスタンダードを批判する表現のようだ。

背景には、現政権は正義と公正の実現を目指すと約束したのに、ソウルや釜山の市長がセクハラ問題で自殺、辞任したり、韓国土地住宅公社の職員が内部情報を利用して土地の投機的購入をしたりと、期待が裏切られていることがある。不動産価格は高騰しており、庶民にとって自宅の購入は夢の夢になっているようだ。

言っていることとやっていることが違うのではないか、という怒りはとくに公職者に対して強く現れる。これは別に韓国に限ったことではない。コロナ下五人以上の会食は自粛することになっているのに、自分達は五人以上で会食したと日本の首相も韓国の大統領も批判された。民主主義の世の中であるだけに己を律する重要性はますます高まっている。

ネロナムブル状況に対する反発は社会の潜在的不満、緊張感が高まるほど強まる。○○警察と呼ばれるようなルールを守らない人に対する監視、怒りも同様である。その基盤には庶民の正義感があり、情報社会、ネット社会では一段と強まっている。

日本でも有名人の不倫問題は社会的に大きく取り上げられ、当事者は強い批判を受ける。そこまで追求しなくても、という感じもするが、自分はしていない（多分）だけに正義感がストレートに出るのであろうか。

自分に甘く他人に厳しい、言動不一致のダブルスタンダードは強い反発を呼ぶが、国と国の間でも問題になる。中国は、人権外交を展開する米国が自国の人種差別問題を解決できていないではないかと批判する。日本は、放射能処理水の海洋放出を糾弾する韓国や中国に、では自国はどうしているのか問いたくなる。

外交では国としての価値観に違いがあるとしても、非難の応酬に終始するのではなく共通の出発点を見いだす努力が必要であろう。